

女子高校生における「学校メイク」の役割

— 『Seventeen』 『Ranzuki』 『egg』 の記事分析を通して —

高瀬真莉菜（専修大学文学部ジャーナリズム学科）

1. 研究背景と目的

女性たちは、ある時期を境に化粧を自分の顔に施すようになる。その時期は様々だが、先行研究から進学や就職時期など、10代の特殊環境下といえる学生時期に重なることがわかった。特に社会に出ると化粧は身だしなみとして扱われ、必然的に化粧をする環境が生まれる。女子高校生が施す化粧方法の一つに「学校メイク」がある。メイクは大半の学校で原則的に禁止されているが、学生の間ではメイクを行うことが受け入れられている。このように禁止されているにもかかわらず定着してきた理由には、化粧をする動機や役割があると考えられる。

本研究の目的は、学校内でのメイクにどのような役割があるのかを雑誌記事を用いて分析する。その際、「学校メイク」がいつから女子高校生に受け入れられていったのか、どのように主体的に取り入れられたのか、時系列に沿って記事を分析する。これにより、「学校メイク」の役割とあわせて行う理由も考察する。

なお今回の研究にあたり、『学校メイク』の定義を、「学校内でマニキュア、香水を除くメーキャップ化粧品を施した状態。また医療機器に分類されるカラーコンタクトや化粧品雑貨に分類されるつけまつげを使用している状態。」とする。

2. 研究方法

ティーンズ総合雑誌 No.1 の『Seventeen』とギャル文化に大きく関わった『Ranzuki』『egg』を原則的に全巻対象に読み込む。この調査をふまえて、定量的分析と内容分析を行う。

まず①研究対象とする3誌の特徴と、②中学生との「学校メイク」の違いを踏まえて、③メイク記事内の「学校メイク」の記事数の割合や、④色使いや化粧品などメイク方法の視覚的变化、⑤見出しなどの文字の変化について定量的分析と内容分析により考察する。

3. 研究結果

3誌の特徴として、『Seventeen』は2000年代では浜崎あゆみ風メイクなどの「なりきりメイク」が多くトレンドに敏感でありながら、「ナチュラル」など他者視線を重視している王道モテ雑誌である。『Ranzuki』は2013年の大幅路線変更によりギャル系雑誌から、おふえろ系などの個性あふれる雑誌へと移行していった。『egg』は元祖ギャル系雑誌であり、読者モデルが自身でメイクを行うセルフメイクが多いことが特徴的であった。出会い系のような使われ方をしているなどエンタメ要素を含んでいた。

また予備調査として、女子中学生を対象とした『nicola』と『ピチレモン』を用い、女子中学生の「学校メイク」の実態を把握した。2誌には「学校メイク」による化粧の仕方に大きな差はなく、ビューラー、透明マスカラ、透明グロスが基本的に使われていた。しかし校則との関わりのある記事は、制服の着こなし方やヘアアレンジ、バッグの装飾法に集中して見られたことから「学校メイク」に重きを置いていないことがわかる。

記事数では『Seventeen』は2003年を除き、全ての年で1回は「学校メイク」記事があり、

メイク記事の20%を占めていた。特に新学期時期に集中していたことから初対面などの好印象をもたらす要素になっている。『Ranzuki』は2009年まで「学校メイク」の記事が少ない。また「学校メイク」記事の掲載時期にばらつきがあったことから、『Seventeen』のように学校メイクは特定時期の印象を上げる要素ではないことがわかる。『egg』は2010年に「学校メイク」より先に、「放課後メイク」の記事が掲載されていたことから、学校よりも放課後、つまり学校外を重要視していることがわかる。また、月別で見ると『Ranzuki』以上に分散されている結果となり、「学校メイク」を日常的なものとして捉えていると考える。

メイク方法については『Seventeen』は当初、校種別で校則の厳しさを表していたが、次第に学年別へと変化した。2012年以降は、校則が厳しい学校ではリップやチーク、校則が緩い学校ではアイメイクの化粧品の色味、濃淡を上手く使い分け「学校メイク」を使いキャラを定める要素を担うようになった。これにより、「学校メイク」で個性を出すことが可能となった。

『Ranzuki』モデルは、完璧な状態の70%ほどのメイクをして学校に行き、放課後に100%の「放課後メイク」という名の「休日メイク」を徐々に完成させる、つまり「休日メイク」の70%が「学校メイク」と同義であることがわかる。また元『Ranzuki』モデルの吉木千沙都が独自に行った赤リップ×丸い赤チークのメイクが『Ranzuki』内で特有の文化となった。

『egg』はメイク方法の変化が見られなかったが、2013年からアイシャドウ・アイライナー・つけまつげ又はマスカラ・チーク・リップ・カラーコンタクトが定番化し始めた。これらは「休日メイク」で使用した、化粧品の種類や数とイコール関係になっている。

最後に記事の見出しから見る意識の変化では、『Seventeen』は2004年までは「バレない」ことが重視され、意識は学校や先生に向けられた。2011年までは「美人」「美少女」など外

見重視の見出しが増え、異性へと意識が移っていった。2011年以降「キャラ立ち」などメイクによる主張へと移行し、自己へと意識が変化した。このことから他者視線から自身に焦点を当て、自己主張していく姿勢が出始めたことがわかる。『Ranzuki』はメイクを表す用語の変化が最も大きい。「がっこー」などの漢字が仮名文字であり緩さが見受けられたが、2013年以降は感嘆詞や句読点を使い小説のような異空間を味わいやすい見出しを付けている。またキャラを固定するのではなくTPOに合わせて自身を変化させる意識が見受けられ、学校内での自己表現度が高いことがわかる。『egg』は「学校メイク」に焦点を当てた14記事中10記事は「JK」が使われていたことから「今、ここ」を重視するギャルの考え方に見出しが当てはまっているといえる。「バレる」などの言葉がないことから、校則で縛られた自分よりも理想の自分を学校内でも求めていることがうかがえる。

4. 考察と結論

以上の分析から、「学校メイク」の役割として自己的理由と他己的理由の2つを指摘できた。

自己視点では、分析4・5から「学校メイク」は「個」を表すための媒介となっている。またそれぞれ雑誌ごとに「学校メイク」の特徴はあったが、一貫して2010年以降は「学校メイク」の縛りが緩和され、個性を重要視し始めた。以上から、女子高校生のアイデンティティ等を伝達するためのよそおいの手段が「学校メイク」には顕著に表れている。2010年から2020年にかけて、先輩後輩など年齢の観点からも注目されるようになった。

他者視点では、2010年以降からただ美少女になって異性ウケするだけでなく、周囲からどのように見られるかを重視し生きやすい学校生活を送るための一つの指針となっている。さらに、社会的位置も把握できる。分析4の視覚的分析から『Seventeen』『Ranzuki』は学年や

校則などに合わせて「学校メイク」を変えていることがわかった。これにより「学校メイク」が、自分の学校内での役割や位置関係を表す一つの指標になっているといえる。

上記2つの役割から、自己的理由は「なりたい自分」、他己的理由は「他者視線」を重視していることが明らかになった。「学校メイク」には「よそおい」と「変身」の2つが存在し、各々が思う「なりたい女子高生」に向けて学校メイクが使われていることが明らかとなった。

この結論から考察として、女子高校生における学校は社会の一部となっていると考えられる。ここでいう社会は休日と同義である。もちろん平日も社会だが、休日との違いは10代の大半を過ごす学校における特殊な制限、校則があることだ。そのため、校則に対する順応度の高い「Seventeen」は「バレない」「校則」という言葉が多く、校則に対する順応度が高い。ゆえに学生意識が高いことがわかる。反対にギャル色の強い「egg」や2013年以前の「Ranzuki」は「がっこー」など漢字を仮名文字にすること、また「メイクがバレて反省文を書いてもいい」などのコメントから、学校意識が低く外を重視していることがわかる。以上から、女子高校生は学校という特殊な環境下で社会人になるための柔軟な対応力を、「学校メイク」という媒体を用いて雑誌ごとにそれぞれのやり方で身に付けようとしているといえる。

参考文献

1. 米澤泉「コスメの時代：『私遊び』の現代文化論」勁草書房（2008）
2. 黄順姫「身体文化・メディア・象徴的権力：化粧とファッションの社会学」学文社（2019）
3. 大坊郁夫「化粧行動の社会心理学：化粧する人間のこころと行動」北大路書房（2001）
4. 木戸彩恵「化粧を語る・化粧で語る：社会・文化的文脈と個人の関係性」ナカニシヤ出版（2015）

5. TBS NEWS DIG 「高校38校中37校が”原則、メイクを禁止…”でも、社会ではマナー化…どうすればいいの？」（最終閲覧日2022年11月19日）
6. 集英社小史 1968年『週刊セブンティーン』（最終閲覧日2022年11月19日）
7. SHUEISYA ADNAVI 集英社アドナビ（最終閲覧日2022年11月19日）
8. 『Ranzuki』公式ホームページ（最終閲覧日2022年11月19日）
9. 『egg』公式ホームページ（最終閲覧日2022年11月19日）
10. 文部科学省ホームページ 校則の見直し等に関する取り組み事例
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/s eitoshidou/1414737_00004.htm（最終閲覧日2022年11月30日）